学長就任式「就任の辞」　2022 年 4 月 27 日（於横浜校地チャペル）

東洋英和女学院大学　学長　星野三喜夫

このたび、前任の池田明史先生から学長の重責を引き継ぐことになりました、星野でございます。どうぞ、よろしくお願い申しあげます。本日は学長就任式に、増渕理事長・院長先生をはじめ、理事、評議員、監事の皆様、ご来賓の皆様にご臨席を賜り、恐縮至極に存じます。学院創設 138 年目にあたる東洋英和女学院の長い歴史の中で、大学開学 34 年の今年、7 代目の学長として東洋英和女学院大学の運営を託されたことの重さを、さして広くはない両の肩でひしひしと感じております。

また、就任前および就任後も、皆様より温かい励ましのお言葉を頂戴しました。教職員、学生・保護者、同窓会をはじめ多くの方々のご厚情とお力添えにより学長に就任できましたことに、心より御礼申し上げますと共に、お導きに感謝致しております。

7 代目学長の私の使命は、東洋英和の建学の精神と伝統である「敬神奉仕」の人格形成の教育のもと、東洋英和女学院大学の英和スピリッツとミッションを継承、発展させ、その存在感を高めることだと理解しております。

今ほど増渕理事長・院長先生から身に余るお言葉を頂戴致しました。ご紹介にありましたように、私はこの 3 月まで新潟県は柏崎市にある新潟産業大学で 16 年間奉職し、そこでの最後の 4 年間、学長として第一期を終えたところで、東洋英和女学院大学の学長に迎えられました。私は、最初から大学教員であった訳ではなく、大学を卒業してから 50 歳直前までの約 30 年の間、国際金融を専門とする金融機関に勤務しておりました。そこは、横浜正金銀行を継承した銀行で、職員の半分が常時、海外で仕事をしており、私も 20 代を終える直前に、7 年近くにわたりニューヨークに赴任し、現地スタッフと共に、北米、中米、南米の米州全拠点の運営や戦略企画の仕事に携わってきました。NY での 7 年の勤務を経て日本に戻ってからも、世界各地で開催される国際会議に出席して参りました。海外での生活や、40 か国以上にわたる出張、国際会議への参加を通じていろいろなことを経験してきたのですが（その中には危ない目にもあったことも含まれるのですが）、そこで得た体験や経験、知見、ものの見方・考え方を、これからの日本を背負って立つ若い人達に教えたいと思い、金融機関を自ら辞めて大学教員になった訳でございます。

海外赴任や国際会議への参加などを経験して、率直に感じたことの一つに、海外、特に欧米では日常生活の中にキリスト教がとても深く関わっているということです。良く、宗教と政治の話は日常での会話で持ち出すべきではない、話題は天気や趣味、スポーツ等の差し障

りのないものが良い、と言われておりまして、私もそうかと思っておったのですが、実際は、直接にではないにしても、間接的に、キリスト教関連のことが会話の中で言葉のはしばしに何気なく出てきて、宗教の知識なくしては深い理解はできないことを実感しました。英語に多少は自信があって NY に赴任した私も、英米の文化、特にキリスト教やその文化的背景を理解していないと中々会話に入れない、深い理解ができない、というのを痛感し、勉強の必要性を感じておりました。今般、東洋英和女学院大学に導かれたのを機に、自身の国際金融と経営の専門領域に加え、キリスト教関連の勉強もしていきたいと考えておるところでございます。

さて、私が 50 歳を前にして金融機関勤務を辞めて、大学教員になった理由は、2 人の子供を通じて、米国での教育を目の当たりにし、彼我の差に、良い意味で衝撃を受けたからであります。3 歳で米国に連れていった長女、そして NY で生まれた次女に、現地 NY の、nursery school、kindergarten、primary school と通わせていったのですが、向こうでの教育や教育に対する考え方が、私が日本で受けてきたそれとまったく異なっておりました。3 歳児保育の Nursery school と幼稚園の kindergarten で、まず米国における教育の原点とも言える Show and Tell なるものが開始されます。子供達は毎日順番に、見せたいものや大切にしているもの、自慢にしているもの、例えばクマの縫いぐるみ等をクラスに持って来て、お友達や先生にそれを見せ（つまり show をし）ながら、それにまつわる話を皆の前でする（tell をする）というものです。この Show and Tell は primary school の小学校低学年まで続きますが、子供たちは、この Show and Tell を通じて、自分が得意とするもの、自分が誇りに思っているものを目の前で相手に具体的に見せながら、自分の言葉でその良さや理由を伝える、アウトプットの術を身に付けていきます。クラスメイトからの質問に対してもきちんと受け答えをします。Show and Tell は自身の意見や考え方を積極的に表現して、自己と他を区別する、米国の価値基準や表現能力を小さい時から繰り返し訓練を受けさせる教育の原点になっています。その後の、小学校高学年から junior high school 中学にかけては discussion、そして high-school 高校になると debate に引き継がれて、議論や討論のスキルや作法の学びに引き継がれます。米国がまさしくこの Show and Tell のプレゼンテーションの国であるのに対し、日本では「出る杭は打たれる」「能ある鷹は爪を隠す」という言葉に代表されるように、個人の意見や希望を表現する際には、良い・悪いは別にして、「常に周りとの関係において出すぎないようにして行う」という控え目の show、控え目の tell が美徳とされてきました。米国人との議論では Show and Tell の訓練を受けていない日本人が絶対的に弱いのは仕方のないことだと、つくづく感じた次第です。しかし、これから増々進展するグローバルの世界で日本人が互角にやっていくには、これではいけない、日本の教育を少しずつでも変えていかなければいけないのではないか、との思いが自分の中で徐々に雪だるまのように強くなり、50 歳目前になってはいましたが、それまで歩んできた金融の世界から教育の道に舵を切ることにした訳です。

振り返って、キリスト教に基づく人格形成を重んじる東洋英和女学院大学は、東洋英和女学院の「敬神奉仕」を建学の精神として、そこに教育理念をぎゅっと凝縮させております。「敬神奉仕」を実践すべく、本学は人間、保育、国際社会、国際コミュニケーション、英語等に代表されるリベラルアーツ教育に力を入れてきておりますが、それはつまりは、これらの要素を通じてキリスト教について知り、学び、理解を深めることと同義であると考えております。特にリベラルアーツ教育は建学以来の重要な要素です。先人達は、リベラルアーツを「教養」と訳しましたが、もう少し相応しい日本語訳がなかったのだろうかとかねがね考えて参りました。リベラルアーツとはすなわち、単に「教養」とか「素養」、知っておいた方が良い基本的知識といった軽いものではなく、自分の頭と身体で世界を理解し分析して、さまざまな課題の発見と解決のための糸口を導き出す知性、と理解すべきと考えております。従いまして、リベラルアーツ教育に力を入れる東洋英和女学院大学の学生は、キリスト教の「敬神奉仕」の建学の精神の礎の下、神を愛し、人を愛すること、神に愛されている自分という存在を尊く思い、自分と同じように隣人を受け入れて愛することを学び、その過程で、自ら求め、自ら挑戦し、自ら新たな道を切り開いていける人間になって巣立っていく、そういった教育が原点であります。私自身としましては、それに加えて、幼い時から show and tell 文化で育ってきた海外のカウンターパートとなる人達にも十分太刀打ちできるよう、自己肯定感を高めて、自ら考えて自ら表現する作法や技能を本学在学中に身に着けて欲しいと強く思っています。それこそが東洋英和女学院大学が再確認すべき女子教育であり、本学の教員、職員はそのような視点に立ち、学生たちを教え導く教育を行っていくべきと考えております。そういったことを考えますと、東洋英和女学院、そして学院の高等教育機関としての東洋英和女学院大学での教育はとても重要で、期待されている役割も大きいのであり、我々教職員は心してそれに取り組まなければならないと、改めて強く思うのであります。

大学運営が増々厳しい環境に置かれている中、冒頭に申し上げましたように、7 代目学長の私の使命は、東洋英和の建学の精神と伝統である「敬神奉仕」の教育のもと、東洋英和女学院大学の英和スピリッツとミッションを継承、発展させ、その存在感とブランディングを高めることだと理解しております。そこに、show and tell の、自ら考え自ら積極的に発信する作法や技能も加えた人間形成の教育を実践すべく、学長としてこれから日々全力を挙げて取り組んで参りたい、このような思いを新たにしているところでございます。

簡単ではございますが、これをもちまして、学長就任にあたり、私のご挨拶と就任の辞とさせていただきます。本日はこのような機会を与えられましたお導きに、心より感謝申し上げます。ありがとうございました。